

## 「川崎病血管障害は冠イベントの危険因子か」に関する研究

三谷義英、津田悦子、賀藤 均、小川俊一、中村好一、高橋 啓、藤原優子、鮎澤 衛、小林 徹、市田露子、松島正気、鎌田政博、檜垣高史、須田憲治、横井宏佳、濱岡建城

1) 日本川崎病学会小委員会

### 研究要旨 (400 字程度)

川崎病既往成人の ACS に合致する冠イベントの実態と病態における血栓形成、責任病変の血管壁/内腔病変、冠危険因子の関連、診療上の問題点を検討した。川崎病既往成人のある subgroup は、急性冠症候群のリスクを伴う可能性を示唆した。冠危険因子数は低く、責任病変は、血栓形成を伴い、瘤近傍の IVUS 上の内膜石灰化を伴う狭窄が関連するが、瘤径、狭窄度は必ずしも高値でない。小児期からの経過観察例は 1/4 であり、診療中断、小児期 KD 未診断例が 3/4 を占めた。成人期まで診療中断させない診療体制 (学校検診、診療移行) の構築、移行例・成人例の評価法の確立 (リスク層別化)、関連学会間の連携を通じた循環器内科とのコラボレーション、親の会との連携等の社会活動が重要である。

### A. 研究目的

川崎病 (KD) の報告以来 45 年が経過し、既往者は約 27 万人、うち成人例が 11 万人余りにのぼる。従来、遠隔期 KD 後冠障害 (CAL) 例において、内皮障害、慢性炎症、冠動脈壁の形態的、質的異常が指摘され、近年、KD 既往成人の急性冠症候群 (ACS) 類似の冠イベント例が散見される。KD 既往成人の ACS に合致する冠イベントの実態と病態における血栓形成、責任病変の血管壁/内腔病変、冠危険因子の関連、診療上の問題点を検討した。

### B. 研究方法

2000-10 年に ACS に合致する成人期 ( $\geq 20$  歳) KD 既往/疑診例の全国の病院ベースの後方視的観察研究。

(倫理面への配慮)

三重大学倫理委員会で承認後に施行。

### C. 研究結果

68 例 (男女比 51/17、中央値 35 歳)。KD 診断は、急性期診断 32 例 (診療中断 16 例)、画像等からの遠隔期診断 36 例。5 項目中冠危険因子数 ( $n=65$ ) 0 (24), 1 (25), 2 (11), 3 (5)。予後は、1 か月生存 56 例。

責任病変の評価では、血栓の証明例は 42/57 例、拡大病変 ( $n=62$ ) は、なし (10), 4-5.9mm (11), 6-7.9mm (16), 8mm 以上 (25)、IVUS 上の内膜石灰化は 12/12 例であった。推定発症直前狭窄度 ( $n=12$ ) は、0% (1),  $\leq 50\%$  (5)、51-75% (2), 76-99% (4)。

### D. 考察

KD 既往成人のある subgroup は、ACS のリスクを伴う可能性を示唆した。冠危険因子数は低く、責任病変は、血栓形成を伴い、瘤近傍の IVUS 上の内膜石灰化を伴う狭窄が関連するが、瘤径、狭窄度は必ずしも高値でない。小児期からの経過観察例は 1/4 であり、診療中断、小児期 KD 未診断例が 3/4 を占めた。

### E. 結論

成人期まで診療中断させない診療体制 (学校検診、診療移行) の構築、移行例・成人例の評価法の確立 (リスク層別化)、関連学会間の連携を通じた循環器内科とのコラボレーション、親の会との連携等の社会活動が重要である。

### F. 研究発表

1. 論文発表 (準備中)
2. 学会発表

シンポジウム

種々の小児疾患の成人期での診療意向の実態と問題  
点、取り組み：「川崎病」

日本小児科学会学術集会総会 2014

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得：無し
2. 実用新案登録：無し
3. その他

